

金子翁二十年祭祝詞

福田 義文

是の生田神社会館の真新しき一室を暫し祭庭を設け、招き奉り坐せ奉る故鈴木商店大番頭金子直吉大夫人の御前に、齋主生田神社権宮司福田義文謹み敬ひも告げ奉ら

くは。あわれ汝命はしも、慶応二年六月十三日、高知県名野川村に生れ給ひて、十二才にて砂糖屋の丁稚となり、次で質屋の店員となりながら、孫子の書を始め漢書を自から学び、汝命が二十一才の春、神戸の鈴木商店に入り給ひ、殊に店主鈴木岩治郎主命み去り給ひて後は、未亡人よね刀自を輔けて、柳田富士松主君と相共に力を合せ心を一つに、辰の営業を日に異に押し進め、三十五才になりて妻君徳刀自をむかえ、長男文蔵主、次男武蔵主、姫君須磨子刀自など麗しき子宝に恵まれ給ひ、又数多くの社員と子弟を教え導き、五十数社に及ぶ産業の要とも申す可き、多数の会社を興し給ひしものを、ゆくりなき経済界の変動により、口惜きかも、昭和二年遂に鈴木商店の灯は消え果て、それから再び立ちいでむと大志を立て給ひし

も、事志と違ひ、世の状も日支事

変、太平洋戦争の波はいよいよ激しくなり、日々暮しも乏しく苦しくなりまさる昭和十九年二月二十七日未明、はらからの看護の甲斐もなく、思ひは北ボルネオのセメント、サラワックのアルミ製造をまぶたに描きつつ、はかなくも七十九才をこの世の限りと、東灘区御影掛田にて、置く霜の消ゆるが如く静かにみ去り給ひぬ。

今つらつら思ひめぐらせば、金子直吉大夫人の一生は、世にも稀なる波瀾万丈の一生とこそ申す可けれ。その烈しかりし一生にありて、花の盛りは、大正五・六年頃になむありけむ。

汝命が小川実三郎氏に手渡せしロンドン支店長高畑誠一の君に宛たまひし、大正六年十一月一日付の文の一節を読み、大人の高き志を思ひ惚ばん。「今当店のなし居る計画は凡て満点の成績にて進みつつ在り、お互に商人として此の大乱の真中に生れ、而も世界的商業に關係せる仕事に従事し得るは、無上の光榮とせざるを得ず。即ち此の戦乱の変遷を利用し、大儲けを為し三井、三菱を圧倒する乎、然らざるも彼等と並んで天下

を三分する乎。是鈴木商店全員の理想とする所也。小生共是が為生命を五年や十年早くするも縮少するも更に厭う所にあらず。要は成功如何に在りと考え日々奮戦在り、恐らくは独逸皇帝カイゼルと雖も、小生程働か居らざるべしと自任し居る所也。小生は今、須磨自宅に於て出勤前此書を読むは、日本海々戦に於ける東郷大將が彼の「皇国の興廢此の一挙に在り」と信号したると同一の心持也。」

とこの文の中にある言葉こそ、汝命が常に商人は十字街頭に立てと雄叫び給ひし、一世の心意氣こそ申す可き。

今から六十年も七十年も前に汝命が、日本は小さき山国で資源に乏しき国にあれば、海外の原料を獲得し、工業、重工業、化学工業、エネルギーなど確保してこそ、立国の第一とのたまひて自ら之を行ひ給ひしは、明治、大正初期の偉大なる実業家なりしと称奉り、かつての鈴木商店に御教を受けし人等も、次々に志を立て営業を起し、それぞれに立栄え行く事を嬉み奉り辱み奉る隨に、偉大なりし金子直吉翁と柳田富士松翁を慕ふ心弥優りて頌徳会を作り、昭和二十五年には両翁の伝記を著し、昭和三十一年二月二十七日には二十

年祭を懇ろに仕奉り。昭和四十七年一月一日には「金子直吉遺芳集」を著すなど、種々に仕奉るが中に月日は流るる水の如く過ぎゆき、今ほしも日本の国力も世界に誇る可き工業の国となりつれども、去年の秋の頃より石油、鉄、銅、穀物など、にわかに乏しくなりゆきて、経済界もいたく荒びゆく有様なれば、辰巳会員も改めて第一次世界大戦後の不景氣、大正七年の米騒動、関東大震災、金融恐慌、鈴木商店倒産、殊に汝命が破れた帽子をかぶり儉約を旨とし給ひしことなど思ひ比べて、金子大人の命を思ふ心のいよいよつり行き

て、今日ほしも身を清め心を正して三十年祭の御祭り仕奉るになむ。汝命よ。如何に世の中は移り変わり、人の心は紙より薄しと云ふ中に辰巳会の集は、友情も恩義も深く、まことに端なき言葉なれども、金子直吉翁のこともなれば、爪のあかでも何でも煎じて飲まんばかりの人ばかりにて、一片の言葉も忘れじと契りも固く、今年齢八十八才の辰巳会高畑会長を始め、会員諸々杖をつき足を引きづりながらも、御前に参集ひ、御前には懐しき辰ののれんを飾り、在ませし日に好み給ひし、白紅の葡萄酒は申さくも更なり、亀の子煎餅、

金平糖、干柿、リンゴ、焼栗、バナナ、洋食に至る迄、二十年祭にもいやまさりて仕奉り、金子直吉翁の懐しき姿、み心の中など賑々しく語り合ひ、その折々に読み給ひし片水の面目あふる俳句「天下取る狸おやぢの昼ね哉」「初夢や太閤秀吉那翁」「この世からあの世に続く霞かな」など、この世からあの世の心を詠み給ひし句など、そぞろに口づさみつつ、ゆらゆらと揺らぐ灯火の彼方に、立て給ひ、残し給ひし数々のみ跡を、こももあり、かくもありと会員等、悲しきまでに慕ひ奉り、しのび奉る状を、幽世ながら、あな楽し、あな嬉しと、御心も安らかに享けて、後に遺し給ひし家族親族は更なり、かつて懇ろに御教を受けし人々も一人減り、二人減りて、とみに淋しくなり行けば、かく仕奉る辰巳会の諸人を幸く真幸く護り給ひ、導き給へと、謹み敬ひも告奉らくと申す。

二十年、三十年の御祭を仲執りもちて我は拝む。 義文 昭和四十九年一月二十一日

御礼のことば 金子武蔵

今回父直吉の三十年祭に当りましては辰巳会々長初め皆様の御厚情に依り敬きかに御盛儀を修めることが出来得ました事は父は元より拙家一同感銘に堪えない次第であります。を謹んで御祝申上げます。今後も茲に謹んで御挨拶申上げます。終り本会の為にも何かとお世話願う事に臨みまして皆様の御健康をお祈りが多々あると信じて止みません。 四九、一、二二

〈附言〉

前記金子翁三十年祭に祝詞を奏上されました生田神社福田義文権一代目新宮司に昇進されましたこと、宮司は去る五月八日附を以て十三出来得ました事は父は元より拙家一同感銘に堪えない次第であります。を謹んで御祝申上げます。今後も茲に謹んで御挨拶申上げます。終り本会の為にも何かとお世話願う事に臨みまして皆様の御健康をお祈りが多々あると信じて止みません。

東京支部新年例会

昭和四十九年一月二十五日(金曜日) 於一築地スエヒロ

昭和四十九年の新年を寿ぼぐ新年例会を表記の通り開催した。本年は特別寒気きびしく当日も寒い日であったが最年長の当年満九十才となられた田子富彦氏、米寿の佐々木義彦氏を始め会員御一同益々御元氣に、又本部及び中部支部よりも多数御来臨戴き総員五五名の御出席を得て盛大に開催された。正午鈴木丸衛幹事の開会挨拶により会を始め長老田子富彦氏の首頭で乾杯、宴を開き、設宴中嶋内義治幹事より本年の米寿杯、喜寿杯の東京支部所属会員の方々を次記の通り報告、御出席の佐々木義彦氏に西川支部長より会員一同の拍手裡に米寿杯を贈呈した。

米寿杯 溝口新平、佐々木義彦、戸坂隆治。 喜寿杯 宗 真足、網干尚明、山地 保、広岡一男、富川 顕、石田俊一、(敬称略、生年月日順) 贈呈式のと米寿杯、喜寿杯の方々に對し西川支部長より祝辞を申し上げ、それに対し御出席の米寿杯佐々木義彦氏、喜寿杯石田俊一、宗 真足、広岡一男の三氏より夫々謝辞があり一同長寿を御祝いし宴愈々佳境に入った。

次いで本部代表大幡久一氏、中部支部代表伏見俊助氏よりお話のあったあと斎藤虎吉幹事より東京支部本年度の計画等につき御話が

あり、昨年末入会された元大日本塩業株式会社関係の方六名の内今

回御出席された庄司雅一、請川耿、荒木從繩、建部清也の四氏の新人

を紹介と各氏の挨拶、及び関西より東京へ転ぜられ初御出席の加藤雄

東京支部春季例会

昭和四十九年四月五日 横浜三溪園及隣花亭にて

桜花爛漫の横浜市宮公園三溪園での清遊、同園隣の隣花亭での設宴で一日を楽しもうと四月五日の例会が開催された。三溪園は五万八千坪の敷地の内に三つの溪谷があるので名づけられ明治初期横濱の生糸商原富太郎氏(号三溪)により創成された庭園で中央の丘の上に京都加茂村燈明寺に至町時代に建造されたと云う三重塔(重要文化財)が移築、そびえ立っている外、重要文化財指定の建造物八、歴史的建造物多数の外、丘に、広庭に、池に、四季折々の草花を無数に配し特に梅二千本、桜二千本等、誠に名園の誇り高い名園であり、隣花亭は隣接の地にあり三溪園の景観が一望される田舎家風、茶席造りの名料亭である。 前夜来の時化模様で天気は朝方各所に俄か雨が降り一時険悪な空模様となったので出足をくじかれ御欠席となられた方もあり後記の

予定人数より聊か減ったと云え神戸本部よりは柳田義一氏を始め四名の御参加を得、会員も満九十才を迎へ益々御元氣な田子富彦長老を始め鈴木丸衛、楠本直美御両氏の長老組も御元氣に出席された外、婦人会員並に御夫人連十二名が花を添えられた上、午前十一時頃よりは暖かく晴天無風の絶好の花見天気となり、少し早目かと思われた桜も此の暖氣に誘われたか満開となつて誠に盛會裡に楽しい一日を過す事が出来欣快の至りであった。